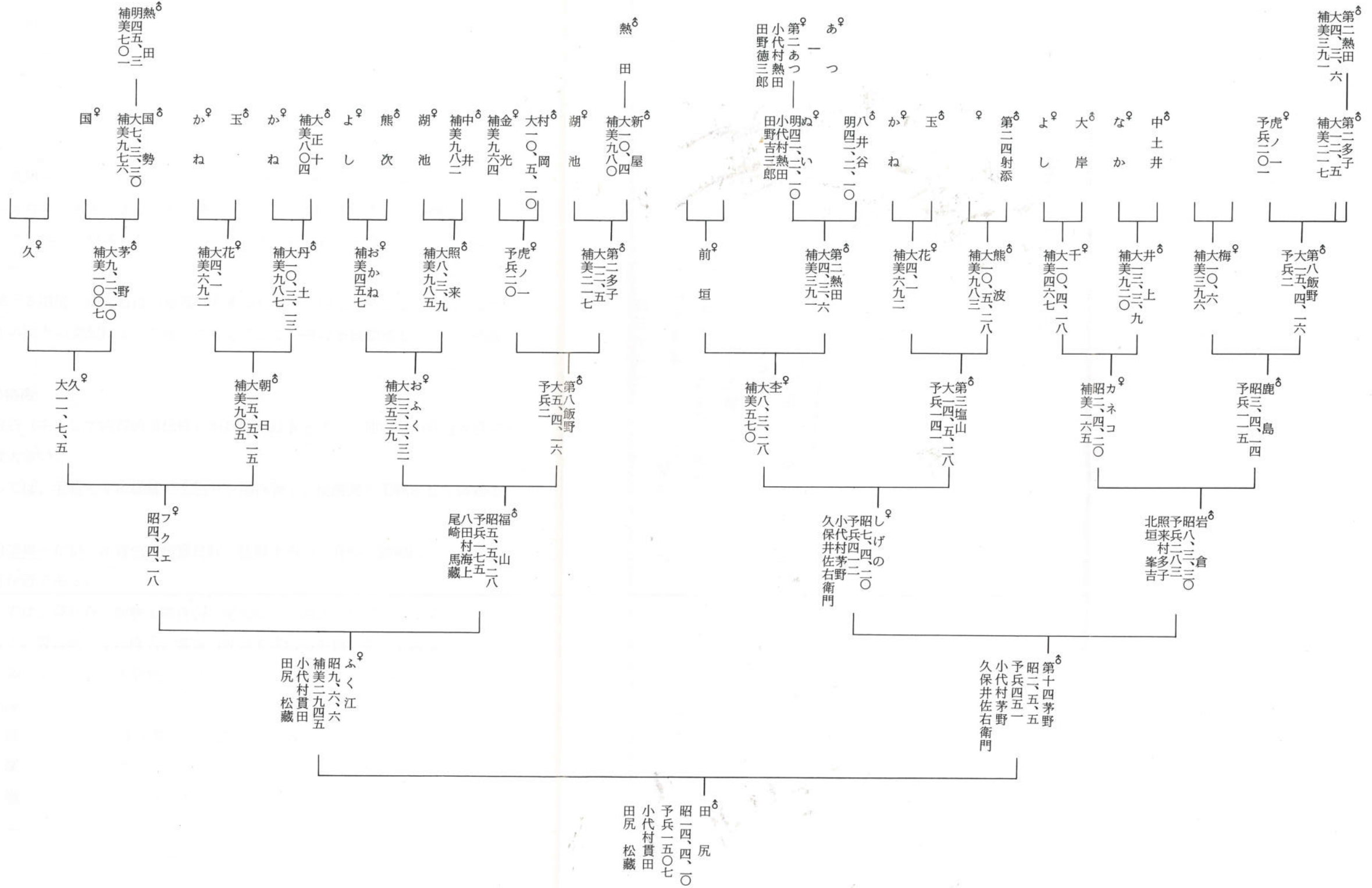


田 尻 号 系 統 譜



田小
野代
吉村
三新
郎屋

あ
つ

♀ — ♀ — ♀ — ♀ — ♀ — ♀ — ♀ — ♀ — ♀ — ♀



(2) 熊 波 系

熊波（補美983）第三塩山（予兵141）第二秋岡（予兵150）から茂福（黒高22）に連なる線がこの系統の主流と考えられる。

茂福にはその母方祖父に田尻（予兵1507）が入っているので、それ以後は熊波系と中土井系とが混じったことになる。

特色としては皮膚、骨緊、顔品、飼料の利用性、体積が美点とされ、角色（鰯角の程度）腿が欠点とされる。

(3) 長 栄 系

長栄（予兵1）の父第二熱田は、周助蔓の始祖雌牛「あつ」の曾孫に当り、異父兄弟熱田（補美701）と共にあつた蔓の始祖種雄牛とされた牛である。

つまり長栄系はあつた蔓の雄系直系といえる。兵庫県の予備登録第1号の牛で雄大で、尻長の長い資質のよい優良牛といわれたが、昭和20～25年を境としての長栄系は消失した。

特色は資質、品位、体の伸を美点とし、やや小格、体型上の優点が少ないのが欠点とされた。

長栄は大正11年3月30日美方郡小代村平野長岡栄三郎方で生産した。

第八節 あつた蔓基礎種雄牛「田尻号」

1. 田尻号（予兵1507）の略歴

昭和26年6月全国和牛登録協会の蔓牛調査委員により、基礎牛として雌牛7頭、種牡牛として「田尻号」の指定を受けて以来、最大限に活用されて但馬牛改良の功績は大きい。

今日の兵庫県種雄牛は殆んど全部田尻の子孫であり、血統上に占める「田尻」の重さは絶大なものである。

田尻号頸彰記（美方郡畜産販売農業協同組合連合会、あつた蔓牛組合発行）によれば次のとおりである

昭和14年 4月10日	兵庫県美方郡小代村貫田田尻松蔵方に生れる。
14年10月	美方郡畜産組合に種雄牛候補として買い上げられ、直ちに兵庫県種畜場但馬分場に育成預託

16年、17年	美方郡照来村に配属繁殖に供用		
18年 3月～22年 2月	〃	小代村	〃
22年 3月～25年 2月	〃	村岡町	〃
25年 3月～29年	あつた蔓造成のため再び小代村に配属		
29年10月18日	老衰死		

2. 血 統

父方の雄系祖先にも母方雄系祖先にも「♂中土井」(補美984)があり、雄系からみれば正しく中土井系である。また父方の雌系にも母方の雌系にもあつた蔓種雄牛の「♂第二熱田」か「♂熱田」がみられる。そのためにあつた蔓造成組合において正種雄牛として供用された。

要するに「♂田尻」は父方母方双方ともあつた蔓と、中土井系とを含む同じような血統構成のものの同士の交配によって産したもので、2系統の系統繁殖というべき所産である。

3. 田尻号の特徴

優れた資質(主として肉質の遺伝性)が兵庫県はもとより、他府県の資質改良に貢献した功績は大きい。

美点としては、毛質とくに繊細で毛色やや褐み強く、皮膚薄く柔軟にして体軀のしまり優秀。

角は平角であつたが、水青色で角質良好。肢蹄よろしく脊幅、腰幅広く、当時としては尻幅に富む方であつた。

欠点としては、登り脊、前勝で腿貧弱、尾元高く、現在としては小格であつた。

要約すると、資質がとくに優秀、繁殖力旺盛で遺伝力が強いことである。

田尻号の満13才のときの体型測定値は次のとおり

(単位はcm)

体 高	133.8	十字部高	131.6	体 長	167.4	胸 囲	205.5
胸 深	76.0	胸 幅	50.0	尻 長	58.0	腰角幅	49.0
臍 幅	47.0	坐骨幅	32.0	管 囲	18.5		

4. 繁殖成績と遺伝状況

田尻号の生産頭数は供用年限が永く1,463頭（昭和17年～29年）であった。当時は自然交配であったので今日のものに比して少ないが、当時としては非常に多い。

産子のうちの登録頭数は792頭、種雄牛となったものが108頭（登録簿第13巻までのもの）で、19%強が種雄牛となっている。

産	歴		
昭和17年	♂ 47	♀ 45	計 92
18年	♂ 43	♀ 50	計 93
19年	♂ 11	♀ 10	計 21
20年	♂ 29	♀ 32	計 61
21年	♂ 28	♀ 32	計 60
22年	♂ 26	♀ 45	計 71
23年	♂ 52	♀ 43	計 95
24年	♂ 62	♀ 50	計 112
25年	♂ 59	♀ 56	計 115
26年	♂ 112	♀ 96	計 208
27年	♂ 95	♀ 90	計 185
28年	♂ 106	♀ 86	計 192
29年	♂ 92	♀ 66	計 158
計	♂ 762	♀ 701	総計1,463

田尻号の壮令期に産犢の少ないのは、当時人工授精が十分に普及せず自然交配だったことと、戦争のため繁殖雌牛が減少していたためである。

体型に関する遺伝は若干不揃いであったが、尾元の高い点を強く伝えた。要するに田尻号は優良雌牛に交配された関係もあるが、種雄牛をはじめ優良な雌牛を多数生産し、ことに資質の改良に非常に貢献した。

第九節 田尻号の産子の主要種雄牛

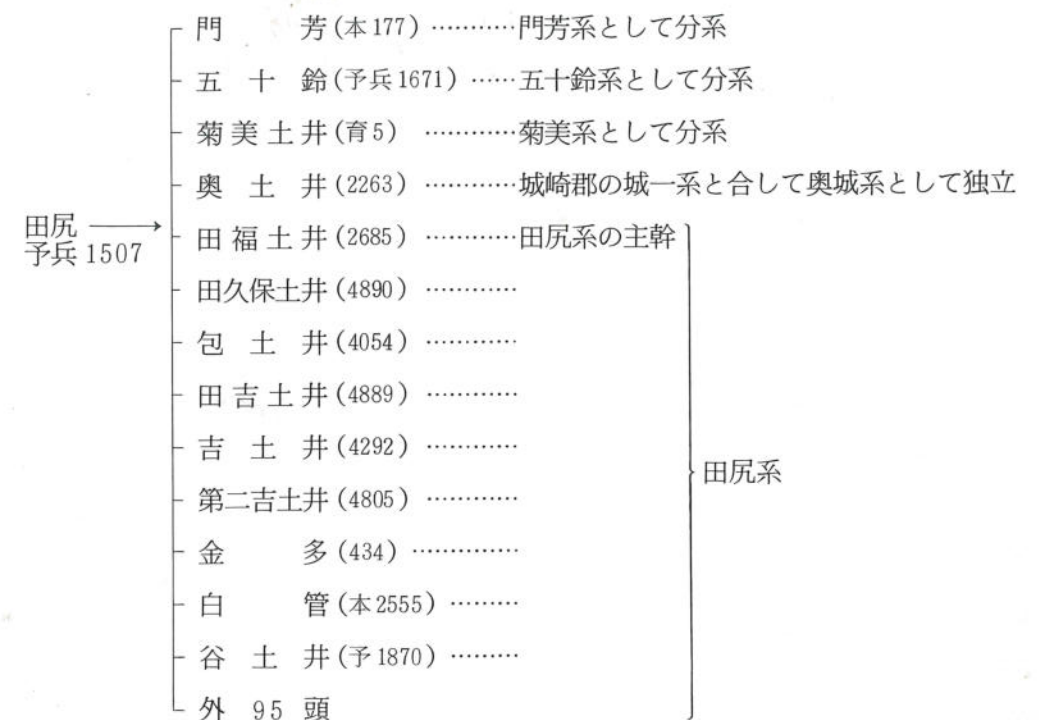
和牛種雄牛系統的集大成（全国和牛登録協会）によれば、田尻の産子で種雄牛になったものは108頭余に達するが、そのうち但馬地方で子孫が大いに繁栄したものは次のとおり

である。

1. 田 尻 系

田尻の雄系子孫のうち門芳、五十鈴、菊美土井の子孫は独特の美点欠点をもっており、田尻系から分系として独立させたので、これらの3頭とその子孫を除いたものを田尻系（本系）としてまとめたものである。

田尻系のなかでは田福土井、田久保土井、包土井、金多、田由土井の子孫が繁栄したが、とくに田福土井は成績抜群で田尻の後継として随一であり、田福土井の子孫が田尻系の主幹となっている。



2. 門 芳 系

門芳系は門芳に始まり、昭和17年3月1日美方郡照来村切畑、門村芳太郎方で生産された。

晩年には愛知県で供用されたが、実に16年2カ月間繁殖に供用された。兵庫県の種雄牛のうちで最長年供用であり、全国的にみても1、2を争うものである。

3. 五十鈴系

五十鈴系は五十鈴に始まり、昭和17年3月17日美方郡照来村丹土、杉岡政夫方で生産された。

予備登録のため産子頭数と登録頭数以外に記録が殆んど残っていない。父方にも母方にも、あつた蔓の血統が入っており、資質優れ体緊実な、あつた蔓の特色をよく備えていたので、あつた蔓造成組合の交配種雄牛の1頭と指定されていた。

4. 菊 美 系

菊美系は菊美土井に始まり、昭和29年4月23日美方郡小代村大谷、坂本吉松方で生産された。

兵庫県の系統のなかでは最も若い。それにも拘らず一つの系統として挙げられたのは、菊美土井の子孫は当時としては大型で体高が大きな点、伸びはよいが体深不十分な点、被毛がとくによい点などの遺伝力が強く、他の田尻の子孫と区別さるべき特色をもっていたからである。

5. 田尻号の息子牛で種雄牛

候補になった頭数

兵庫県内では種雄牛に73頭供用されたが、他府県で登録された牛は香川12、京都24、宮城2、山口1、大分1、和歌山19、熊本2、群馬4、愛知13、島根2、新潟1、富山1、福井4、静岡2、奈良2、大阪4、岐阜10、三重8、滋賀3、岡山4、高知2、長崎1、宮崎15、合計137頭にのぼっている。



「田尻号」の息子牛で種牡牛に供用された頭数分布図

第十節 和牛改良の集団育種事業への発展

1. 和牛登録制度の変遷

和牛の改良事業として、昭和2年から開催された和牛研究会に兵庫県は昭和9年から参加した。登録事業では本登録から犢登記まで各県で独自の登録制度で行い、兵庫県では但馬種と呼称していた。昭和12年から兵庫県畜産組合連合会で予備登録、登録補助牛登記、犢登記を取り扱うようになった。

昭和19年7月に開催された登録審議会により登録はすべて中央農業会で行うことになり、兵庫県では兵庫県農業会畜産部が委託をうけ、全国的登録組織に加入した。

昭和23年3月3日に社団法人全国和牛登録協会が創立されて以来、古くからの「蔓」の整理に努力し、新蔓造成の指導助成した結果、各蔓の育種目標である遺伝的固定も進み、近交系数もかなり高いものになってきた。

昭和25年の登録規定の改正で黒毛和種の形質と能力を改善し、その遺伝能力の強化を図るため高等登録制度を取り入れた。

昭和37年の規定改正で「優秀個体計画生産研究会」により行政区域を越えて、系統間交配する育種改良事業の成果によって、所期の目的を達成し得る見通しがついたので、集団育種事業を組織化して、これを登録制度にとり入れようと育種登録制度を採用した。

昭和37年6月から8月にかけて中国6県下に和牛育種組合が結成され、同年12月12日に和牛育種組合連合会が創設された。

昭和43年に改正した育種目標は、肉用種としての能力および、これに伴う形質を改善しその斉一性を高め、かつこれを確実に遺伝させることである。これには種雄牛の「後代検定」と「産肉能力検定」の結果が登録に採用されることになった。

2. 美方郡和牛育種組合の発足

美方郡東部の「あつた蔓牛組合」は昭和27年、西部の「ふき蔓牛組合」は昭和33年に登録協会に公認されて以来、育種目標である蔓の特色条項の遺伝的固定も進み、蔓牛の近交系数もかなり高いものになってきた。

昭和37年和牛登録協会において育種登録制度が採用になったので、美方郡では昭和39年に「あつた蔓」と「ふき蔓」牛組合の蔓牛を一繁殖集団とした美方郡和牛育種組合が発足した。

その後は肉用牛種畜生産基地の中核的存在となって発展させることになった。

附近の墓地に移転されている。この供養碑には「天下大平天保十五年鍛冶屋村奉納大乘妙典經日本廻国供養日月清明七月十二日行者代八」と彫られている。

3. 臍 蔓

年代は不明であるが、七美郡小代村野間谷の某家の雌牛が放牧中崖より墜落し臍部に負傷した。回復してからも臍部が膨大したが、以後毎年良子牛を生産したので、この子孫を「臍蔓」と称したといわれたという。此の蔓の特色は角質は良くなく小格であったが、体巾、体深に富み被毛繊細で骨緊りがよい方で、体格は中庸で遺伝力が旺盛であったという。

又一説には、美方郡美方町大谷の辺見庄左衛門が実山村の井上平助生産の雌子牛を買受け、明け三才の春、臍帯炎を患ったので桧の葉を煎じて与えたところその年の暮に臍の腫物が破れて全治したという。

この牛は明け4才で今井才助に売却したが5才で雌子牛を産み以後32才まで生存し、繁殖に供用した。

この牛の系統は弟に当る東垣村の中村宇平や広井村にひろがったという。

此の系統は乳量が多く、角は細く、被毛柔軟で褐黒色を帯び体格はやや小格強健長寿で、この子孫は大体二銭銅貨大の臍腫を持っていたので「臍蔓」と呼んだという。

二説の内後者の方が人名もはっきりしているので真実に近いものと思われる。

4. 安 住 蔓

小代村城山安住歌三郎の産犢を温泉村春來の親戚某に譲渡したが後年その子牛を再び歌三郎方に譲受け（富士号）愛育したところ年々良犢を出産したのが始まりといわれ、「安住蔓」と呼んで小代村内に拡がったという。

この蔓の特色は被毛褐黒色で骨細く、体巾中庸で優美、遺伝力が旺盛であったといわれている。

5. 前垣蔓（奎治蔓）

小代村鍛冶屋の某が飼育していた牛（六部蔓の系統）を村岡町萩山家現久蔵方に購入して飼育したところ良犢を生産した。更にこれを小代村茅野前垣奎治が譲り受けた。その孫「おなめ号」の産んだ「奎号」は毎年良牝犢を生産したので、良牝犢系として名声が高くなったことに始まったものである。

特色としては被毛特に繊細で色沢が良く体格は小型で臍巾は狭い方であった。

6. 熱 田 蔓

ここでいう熱田蔓は古い熱田蔓で後日創成された蔓の名称ではない。

小代村新屋字熱田、田野吉三郎の持牛の生んだ「ぬい号」を同地区田野徳三郎が購入して愛育したところ、年々優良な雄子牛を生産して、種牝牛となったものが数頭あったが、何れも小代村内の種牝牛として声価を發揚した。

現在の美方町内で飼育されている牛は、この系統の影響を受けないものは、殆んどない状況であるといわれている。

この「熱田蔓」の特色は、角は稍大で骨味が粗い感じがするが、体軀良好、伸びがあるといわれていた。

第五節 新蔓牛の造成

1. 本県における新蔓牛への胎動

但馬地方には古くから「蔓」といわれるそれぞれ特色を持った系統が多数あったが、年を経るに従って「分れ蔓」が出来た。昭和10年の調査によると百数十にも達したといわれている。

これらの中には商署上つけられた名称や系統的に逆上って根源を調査してみると、同一祖先に発しているものも相当あった。また中にはただ連産、多産だけのものや、雌を多く産するもの、或は好ましくない遺伝子を持っているもの等もあることが判明した。

羽部博士は昭和16年但馬に於ける古い「蔓」について調査されたが昭和17年に蔓牛研究会を組織し、さらに詳細な調査を重ね、将来但馬牛の改良に役立つと思われる基礎牛群を選抜して新しい蔓の造成に着手した。その結果昭和18年には美方郡東部で「あつた蔓」、西部では「ふき蔓」。昭和21年に城崎郡で「よし蔓」。出石郡で「いなきば蔓」。昭和24年には養父郡で「やぎだに蔓」の造成組合が結成され、各蔓についての特色条項の決定、基礎牛の選定、指定交配、産子の検査と保留などが行われるようになった。

又、本県種畜場を中心に特色条項として示されているそれぞれの「蔓」の優良形質の強化固定と、潜在する不良遺伝子の除去を計る為、種牝牛の血統を徹底的に吟味し、系統の分類が行われ、種牝牛の選定、系統繁殖や、場合によっては強度の近親繁殖を行って、この産子を県有種牝牛として買上げ人工授精に供用した。

2. 美方町の「蔓牛組合」

「あつた蔓牛組合」

美方郡小代村（現美方町）は「周助蔓」、およびその「分れ蔓」（「六部蔓」、「多福」、「伊惣」、「前垣」、「藪の下」、「玉椿」、「臍」、「笈ヶ屋」など）が多数愛育されていたが、此の土地がらの傾向から他地方の牛の移入を嫌い「後マヤ」といわれる後継牛は自家保留に努める習慣があり、又よい系統の牛を買入れ保留したい心情が蔓の造成に非常に役立った。

しかし当時は雌牛系のみ重視し、種付は種牡牛業者に全面的に依存していたので、必ずしも同一系統の種牡牛ではなかった為、後年に至り、次第に其の特色とするところが分散した。小代村（小代村は昭和30年から美方町となった）では早くも、大正10年「小代村雌牛育成組合」を結成し、優良雌子牛の保留に努めていたが、昭和17年までは、その改良は一進一退の経過をたどっていた。

昭和17年以来、前述のとおり羽部博士、奥井廉、神原亀松、山南好一等の指導により、「周助蔓」およびその「分れ蔓」の現存子孫中、形質優良で産子成績の良好なものを選抜指定し、それに同系統の優良種牡牛を指定交配して、その系統繁殖を励行することによって新蔓を造成しようとした。これに「あつた蔓」と命名し、（小代村畜牛改良に貢献した「あつ」およびその曾孫「熱田」「第二熱田」両種牡牛の名に因んで命名した）基礎牛として雌18頭、準基礎牛24頭を指定し「蔓」の造成に着手した。しかし蔓牛組合を結成して本格的活動を開始しようとする直前に第二次世界大戦に突入する事となり、此の組合は自然消滅となり畜産行政は衰微した。

3. 「あつた蔓牛組合」の再発足

終戦後の昭和22年12月頃から再び蔓牛組合結成の機運が盛り上り、昭和23年2月「小代村あつた蔓牛改良増殖組合規定」を制定。翌24年9月「小代村あつた蔓牛増殖組合」を結成したが、後羽部博士の助言により、名称を「あつた蔓牛組合」と正式に決定した。

昭和26年6月全国和牛登録協会の蔓牛調査委員により基礎牛を厳選した結果正基礎雌牛7頭、基礎種牡牛「田尻」の指定を受け翌年1月公認蔓牛組合となった。

あつた蔓牛基礎牛名簿

（昭和27年1月）

番号	名号	生年月日	登録番号	血統		畜主・所有者
1 (社)	田尻	昭. 14. 4. 13	予兵 1507	父 予兵 1541 母 補美 2945	第14茅野 ふく江	所飼 有養 美方郡畜連協 小代農協
特一(牝)	ふく江	昭. 9. 6. 6	補美 2945	父 予兵 175 母	福フク 山エ	水間 中村一夫
基一(牝)	つる明	昭. 19. 4. 22	予兵 6053	父 予兵 1507 母 予兵 210	田尻 幸三	佐坊 中村林次郎
基二(牝)	つる明二	昭. 20. 5. 5	本黒 4183	父 予兵 1507 母 予兵 210	田尻 幸三	佐坊 中村鶴蔵
基三(牝)	いし明	昭. 19. 2. 25	予兵 6048	父 予兵 1507 母 予兵 889	田尻 幸三 きよちよ	茅野 久保井重一
基四(牝)	さか代	昭. 21. 3. 22	本黒 8083	父 予兵 1507 母 予兵 889	田尻 幸三 きよちよ	大谷 井上文洋
基五(牝)	つや子	昭. 20. 3. 7	予兵 7009	父 予兵 1610 母 予兵 350	長頼 まつまえ	神場 中村包政
基六(牝)	つる松	昭. 20. 3. 12	予兵 6712	父 予兵 1507 母 予兵 1570	田尻 幸三 さぶ	新屋 植垣芳三郎
基七(牝)	のぶふく	昭. 20. 4. 21	予兵 6775	父 予兵 1507 母 補 2187	田尻 幸三 たけ	東垣 中村信治

（備考）

（略称）

予兵 …… 兵庫県予備登録

補美 …… 美方郡補助登記

補 …… 補助登録

育 …… 育種登録

本黒 …… 黒毛和種本登録

黒高 …… 黒毛和種高等登録

黒育 …… 黒毛和種育種登録

4. あつた蔓の基礎牛

「あつ号」は小代村新屋字熱田、田野吉三郎方で生産されたものは小格で飼料の利用性が乏しい牛であった。しかし品位に富み資質良好、中軀の伸びよく、背線平直であったという。「あつ号」の娘牛のうち「第二あつ」「吉」の2頭の子孫が傑出しこの系統が美方町並に附近の町村に保留されていたがこれ等の系統牛群が「あつた蔓」の中核をなしている。

即ち「第二あつ」は同地区田野徳三郎方に保留され、繁殖用に供せられたが明治42年2月10日「ぬい」という雌牛を生産した。この「ぬい」は体型は優秀であったが、その娘牛には抜群のものはなく、息子には後「あつた蔓」の基礎となった種牡牛「熱田」（父牛は温泉）や「第二熱田」（父牛は八井谷）を生産した。

「第二あつ」の妹牛の「吉」は同じく小代村新屋田野常右衛門方に飼われていたが、姉牛とは反対に娘牛に良い子を残した。

「♀吉」の娘牛でその子孫で保留されているのは「♀慶」「♀新屋」「♀つね」「♀とし」の4頭である。

これらの雌牛に前記の「♂熱田」や「♂第二熱田」を交配して「♀あつ」の系統繁殖が自然に行われ、今日の基礎が出来たものといわれている。

とりわけ自然交配によって産れた「♀つね」は繁殖成績は抜群で、その娘の「♀新庄」は「あつた蔓」の中心となった。「♀つね」に種牡牛「♂実山」を交配したものが「♀新庄」で、大正14年3月6日生れ、昭和22年、23才で老衰死するまで連産し、その繁殖成績は良好であった。

「♀あつ」の子孫とは別に「♀あつ」の妹「♀甲」および「♀しん」の2頭の子孫も美方町及びその周辺に保留されその系統も本蔓に入れられている。

要するに今日の「あつた蔓」の成因は「♀あつ」の娘の「♀第二あつ」と「♀吉」との2系統間の系統繁殖によるもので、常に同系統内で生産された優秀な種牡牛を利用したことによるものである。

以上のように、本蔓はすでに外ぼうの諸形質の固定が進んでいたものと考えられ、蔓の基礎的条項を具備するのみならず、特色もよく揃っており、失格損徴も殆んど出現する事がなくなってきた。

小代村
新城山
藤村
新藏

大正五、五、一〇
小代村猪谷
前田寅藏

大正一〇、四、二
小代村猪谷
前田寅藏

予一五八三
昭二〇、六、二八
小代村猪谷
前田寅藏